

東日本大震災被災者の長引く後悔に関する基礎的検討

—防災活動に取り組む目的を考えるために—

A Fundamental Study on Sufferers' Long-Lasting Regrets of the Great East Japan Earthquake

—What is the Priority Purpose of Disaster Prevention Activity?—

藤本 一雄¹

Kazuo FUJIMOTO¹

¹千葉科学大学 危機管理システム学科

Department of Risk and Crisis Management System, Chiba Institute of Science

This study examined the long-lasting regrets of sufferers due to the 2011 Great East Japan Earthquake based on the written record of 246 sufferers' experiences. 23 experiences which contained the word of "regret" were found among 246 experiences. These written experiences were classified in terms of individual attribute (gender, age, and occupation), actual action at the time of the disaster, and counterfactual thinking (thoughts about alternatives to past events, i.e., thoughts of what might have been). As predicted, the result suggests that the loss of life of family member mainly triggers the long-lasting regret.

Keywords : regret, the Great East Japan Earthquake, experiences, counterfactual thinking

1. はじめに

東日本大震災において被災者は多種多様な「問題」に直面した。問題とは、望ましい状態と望ましくない状態とのギャップと定義される。平常時から防災活動に取り組む目的は、災害時に予想される望ましくない状態を避けるためと言えよう。しかしながら、望ましくない状態と一口に言っても、その捉え方は人によって様々であるため、そのことが防災活動への取り組みを阻害している一因とも考えられる。

他方、問題の定義と類似する感情に「後悔」がある。後悔は、実際に直面している望ましくない状態(事実)と、その事実に反して想像する望ましい状態(反事実)とを比較して生じる感情である。言い換えれば、望ましくない状態に直面したときに、後悔の感情を抱くことがあると言える。そこで、東日本大震災の被災者が実際に後悔している事例から、どのような事態を望ましくない状態として受け止めているかを把握することにより、今後、住民(個人)が防災活動に取り組む上での目的を考える(あるいは再確認する)ための参考にできないかと考えた。

そこで、本稿では、東日本大震災の被災者の証言記録集に基づいて、被災者の後悔に関する証言を整理・考察した結果について報告する。

2. 使用した資料

後悔には、精神的な打撃を与えるけれどすぐに消滅する後悔と、容赦なく長引くような強すぎる後悔がある¹⁾。両者のうち、長引く後悔をしないようにすることが、防災活動において優先的に取り組むべき目的と考えられる。このため、東日本大震災の被災者に対して長引く後悔について尋ねる必要があるが、尋ね方によっては、長引く後悔だけでなく、すでに消滅してしまった後悔まで想起して回答する可能性が考えられる。

そこで、本研究では、地震の発生から数ヶ月以上が経

過した時点でも被災者の頭から離れず残り続けている後悔を把握するための資料として、NHK 東日本大震災プロジェクトによる『証言記録 東日本大震災』²⁾(以下、『証言記録』)を用いることとした。これは、NHK で放送されている二つの番組「あの日 わたしは」と「証言記録 東日本大震災」の中で紹介された 246 人の証言を収めたものである。番組「証言記録 東日本大震災」は、特定の地域を取り上げ、複数の住民の証言によって被災のありさまを多角的に再現していくものであり、番組「あの日 わたしは」は、一人ひとりの体験を数多く集めたものである。このため、一人あたりの証言の量(文字数)は、後者(800 字前後)に比べて前者の方が概して多いものの、本研究では、番組の違いは考慮せずに同列に取り扱うこととした。

3. 分析結果

(1) 後悔に関する証言をした被災者

『証言記録』の中から、「後悔」、「悔しい」などの表現を含む証言を探したところ、計 23 人の証言で見つけることができた。その内訳は、岩手県：7 人、宮城県：8 人、福島県：8 人である。これらの後悔に関する証言を、証言者の属性(性別、年齢、職業、都道府県・市町村)、災害時における証言者の実際の行動・結果(事実)、喪失対象、反実仮想ごとに整理した。反実仮想とは、「もし～だったら、……だったろう」というような事実に反する思考のことであり、その他にも、「なぜ、～しなかったのだろう」、「～すればよかった」などの表現も反実仮想に含めることとした。結果を表 1 に示す。

証言者 23 人の性別は、男性：21 人、女性：2 人であり、約 90%を男性が占めていた。一方、『証言記録』のすべての証言者 246 人に占める男性の割合は約 75%(男性：約 190 人、女性：約 60 人)と見積られる。後悔に関しては男女差はほとんどないと言われているが¹⁾、今回使用したデータでは男性の割合がやや高かった。

つぎに、証言者が喪失した対象は、生命の喪失(死亡・行方不明):17人、財産の喪失:3人であり、生命の喪失に関する後悔がほとんどを占めていた。生命の喪失の内訳は、妻:7人、娘:6人(息子の嫁:2人を含む)、親:3人など、「家族」の生命の喪失に伴う後悔が多数を占めていた。一方、消防士・消防団員の場合には、家族以外(地域住民、消防団員など)の生命の喪失に関しても後悔していることが特徴的である(No.2, 20, 23)。

さらに、後悔に関する証言(23人)の中から、反実仮想の表現を含む証言を探したところ、13人の証言で見つけることができた(表1の下線部の箇所)。反実仮想に関しては、自分でコントロールできるような行動について生じると言われている¹⁾。また、物事がもっと良い結果になっていたらと想像する「上向きの反実仮想」と、物事がもっと悪い結果になっていたらと想像する「下向きの反実仮想」の二種類がある⁴⁾。これらを踏まえて、反実仮想の内容を、1. 自分・他人、2. 行為・非行為、3. 上向き・下向き、ごとに分類した(表1の最右列)。

その結果、自分の非行為に対する上向きの反実仮想が多くみられた。つまり、「もし自分が～していれば、もっと良い結果になっていただろう」である。具体的には、もし自分が「逃げろ」と言っていれば(No.1, 2, 11, 22)、もし自分が無理にでも車に乗せていけば(No.5)、もし自分が娘を自宅に迎えに行っていれば(No.13)などである。ただし、これらの非行為は、災害の最中に証言者が気づいていて、あえて選択しなかった行為というよりも、むしろ、事後的に「できたかもしれない行為」があったことに気づいて後悔しているようにも見受けられる。

また、後悔が格別に強烈になる状況は、ある行動に「責任」を負っていて、それがうまくいかなくて、しかも、「もう少し」でうまくいくところだった場合と言われている³⁾。これを踏まえると、表1より、住民は家族を守ることに對して、消防士・消防団員は地域住民を守ることに對してそれぞれ「責任」を感じており、その責任を「もう少し」で果たせなかったために、後悔が長引いているものと推察される。

なお、上向きの反実仮想が多かったことの原因としては、後悔は上向きの反実仮想よって生じることが多いこと¹⁾や、そもそも下向きの反実仮想をすることが難しいこと¹⁾に加えて、今回の証言者が直面している事実が、本人にとって極めて悪い結果(家族の死亡など)であるため、それよりも悪い結果を想像する下向きの反実仮想をすることが非常に困難であったためではないかと考えられる。

(2) 家族を喪失した被災者(後悔に関する証言なし)

前節での結果から、東日本大震災の被災者の多くは、家族を失った場合に、後悔に関する証言をしていることを確認した。その一方で、『証言記録』の中には、家族を失ったにも関わらず、後悔に関する証言をしていない被災者もいる。そこで、表1の証言者(23人)以外で家族を失った証言者(後悔に関する証言なし)を探したところ、10人が見つかった(表2)。

表2と表1の証言者を比較すると、行動・結果や証言に大きな違いは見出すことはできず、ただ単に、「後悔」や「悔しい」などの表現を証言しなかっただけのようにも思える。ただし、大きな禍に遭遇したとき、すべては「すでに決定されていた＝そうなる運命であった」と思い込むことによって諦めることができるとの指摘⁵⁾を踏まえると、証言者にとって諦めることができる理由がある場合

(No.3: 主人は「命は惜しくない」と話していた、No.6: 父親は避難訓練でも「逃げない」と言っていた)には、後悔につながらないのかもしれない。

(3) 家族以外を喪失した被災者(後悔に関する証言なし)

上記に関連して、家族以外を失った場合に、どのような証言をしているのかを知るため、『証言記録』の中から証言者の身の回りで家族以外が犠牲となった事例(後悔に関する証言なし)について調べたところ、8人が見つかった(表3)。ここでの家族以外とは、避難中の近隣住民や避難先に居合わせた住民などである。

表3をみると、証言者8人のうち5人が反実仮想(表3の下線部の箇所)をしており、その5人ともが他人の非行為に対する上向きの反実仮想をしていた。つまり、「もし他人(住民など)が～していれば、もっと良い結果になっていただろう」である。表3と表1の反実仮想を比較すると、両者の共通点は、「～していれば」のように「非行為」について反実仮想をしている点である。一方、両者の相違点としては、家族以外を失った場合(表3)は「他人」の非行為に対して反実仮想をしているのに対して、家族を失った場合(表1)は「自分」の非行為について反実仮想している。この理由は、家族を守ることに比べて、近隣住民などの家族以外(他人)を守ることに對する証言者の責任感が相対的に弱いと推察される。

4. まとめ

本研究では、『証言記録 東日本大震災』を用いて、被災者の長引く後悔に関して基礎的な検討を行った。その結果、被災者の後悔が長引いている事例は、大方の予想通りと思われるが、家族を失った場合が多く、その理由としては、家族を守ることを自分の責任と感じていながら、その責任をもう少しのところで果たせなかったためと考えられる。

後悔に苛まれないようにするには、予想される後悔をあらかじめ書き出しておくことにより、悪い結果になったとき、自分は事前にその可能性を考えておいたと思いつくことが有効との指摘⁶⁾がある。これを踏まえて、災害後に長引く後悔をしないためには、災害が発生した後で下向きの反実仮想(「もっと悪い結果になっていただろう」と考えること)ができるように、あらかじめ自分にとっての最悪の結果(例えば、家族全員が死亡)をイメージしておくとともに、実際に災害が発生した時にそのような最悪の結果に至らないように、平常時から家族の生命の安全確保を最優先の目的として防災活動に取り組んでおくことが有効な方策のひとつと考える。

謝辞

本研究では、NHK 東日本大震災プロジェクトの『証言記録 東日本大震災』を使用させて頂いた。記して謝意を表す次第である。

参考文献

- 1) ニール・ローズ: 後悔を好機に変える, ナカニシヤ出版, 2008.
- 2) NHK 東日本大震災プロジェクト: 証言記録 東日本大震災, NHK出版, 600p., 2013.
- 3) バリー・シュワルツ: なぜ選ぶたびに後悔するのか, 武田ランダムハウスジャパン, 2012.
- 4) Kahneman, D. and D.T. Miller: Norm theory: Comparing reality to its alternatives, *Psychological Review*, Vol.93, pp.136-153, 1986.
- 5) 中島義道: 後悔と自責の哲学, 河出書房新社, p.151, 2006.
- 6) ダニエル・カーネマン: ファスト&スロー<下>, 早川書房, pp.177-178, 2012.

表1 後悔に関する証言をした被災者

No	性別	年齢	職業	県名	市町村名	証言者の行動・結果(事実)	喪失対象	後悔に関する証言(下線部:反実仮想)	反実仮想
1	男性	44歳	消防団員	岩手県	陸前高田市	消防車で住民の避難誘導の活動中、自宅の前を通りかかったところ、妻が庭にぼつんと立っていた。「あ、いるな」と思いながら、「避難してください」と住民にアナウンスをしながら通り過ぎた。	死亡:妻	“(奥さん)「逃げろ、何やっているんだ。早く山の上がれ」って言わなかったらどうなっていたらと思います。翌朝まで後悔、後悔、後悔だね。不安そうにぼつんと庭に立っていた姿があまりに印象に残っていてね。今も忘れられません。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
2	男性	54歳	消防団分団長	岩手県	陸前高田市	地震の後、いっしょに家にいた妻(50歳)と娘に、高台にある実家に早く行くように言った。その後、消防団の活動に従事。津波に襲われる。	死亡:妻、娘、分団員128人のうち28人	“ここが後悔しているところです。なんで体育館にいた本部と3部の団員に、高台に逃げろって言わなかったらどうと。それは、体育館が避難場所だったからです。体育館は大丈夫だと、それ以上の想像力がなかったってことですね。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
3	男性	43歳	漁師	岩手県	山田町	船の沖出しを試みたが、津波に流れ、その後、救助される	喪失:船	“何で初めての地震を受けたときに、そこから1ターニング戻って船を守らなかったのか。それが悔しい、ほんの5分ぐらいの差なんです。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
4	男性	64歳	宮大工	岩手県	大槌町	近くの実家にいる母と姉の様子を見に行こうと家を出たところ、自宅前の国道は車ですでに30台くらいの渋滞。津波が迫ってきたので、車の中の人に「逃げてください」と叫んだ。	死亡:避難中の住民	“とにかく、車を捨ててどうして逃げてくれなかったのかなって思うよね。それが一番悔しい。「あなたに声をかけてもらって助かったよ」なつたはずなのに。それができなかった私も悔しいし、亡くなっていった人たちも悔しかったんじゃないかなと思います。”	1. 他人 2. 非行為 3. 上向き
5	男性	68歳	特別養護老人ホーム・保育所経営	岩手県	大槌町	経営する老人ホームに向かい、その後、海沿いに住む親戚の様子を見に行つたところ、親戚の「逃げる」という言葉を信じて、経営する保育所に向かった。	死亡:親戚	“無理にでも乗っけて来ればよかったのになあ。悔いが残ります。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
6	男性	65歳		岩手県	釜石市	海から1kmほどの実家に両親を心配して到着した後、津波が流れ込んで来て、目の前で両親(父:90歳、母:85歳)と叔母が津波で流された。母親の手をつかんだが、家が壊れたことで、手を離してしまつた。	死亡:両親、叔母	“どうしようもなかった。悔しいけれど、助けようがなかった。自分だけでも精一杯だった。”	
7	男性	65歳	スポーツ店勤務	岩手県	陸前高田市	高台の高齢者施設に避難をした。妻は海の近くの病院で勤務しており、津波に襲われる直前まで患者の避難を手伝っていたという。	死亡:妻	“(妻はやるべきことをやった。それでも生きてほしかったと村上さんは言う。)”“それぐらい俺にとっては大きい人だったから。悔しいけどしょうがないかな、運命なのかなって思うんだよね。今度、もし同じ状況があったら、俺が絶対助けてやるっていう思いはあるね。”	
8	男性	45歳	漁業	宮城県	女川町	船をつないだ後、自宅に戻つたが、当然逃げてくれると考えたので、「避難しろよ」とは言わなかった。その後、再び浜辺に戻つたところ津波に襲われ、家族であらかじめ決めていた避難場所に向かったが、妻(38歳)・父(79歳)・母(79歳)とは会えなかった。	死亡:妻、両親	“おじいさん、おばあさんに関しては、これまでも子どもたちも含めてみんなで大事にしてきたところがあるので、悔いはいんですけれど、やっぱり妻だけは、いまだに悔やんでも悔やみきれないところがあります。”	
9	男性	37歳	水産加工場経営	宮城県	女川町	地震時、母親(65歳)とともに仙台市にいたので、津波を直接見ることはなかった。翌日、母親と女川に戻つたところ、自宅と加工場のすべてが津波によって流出していた。幸い9人の従業員は全員無事だった。	流出:自宅、加工場	“ただ悔しいですね。津波で物はなくなっちゃいましたけど、まだまだやれる。人もいる、原料もある。”	
10	男性	71歳	洋品店経営	宮城県	石巻市	夫婦で、近所のお年寄り連れて龍谷院(寺)に避難して、お年寄りの世話をしていたところ津波に襲われた。2人とも流されている中、自分とところに引き寄せようとしたが、20センチぐらいのところで手が届かず、それきり別れ別れになった。翌日、龍谷院に集められた十数人の遺体の確認をしたが、妻の遺体であることを確認できなかった。	死亡:妻	“うちの家内を見聞違えたんだ、それが悔しくてさ。何かそのときはわからなかったんだよね。”	
11	男性	63歳	農協勤務	宮城県	山元町	地震の揺れが収まった後、自宅にいる妻(57歳)、長女(32歳)、次女(29歳)、次女の息子(生後5ヶ月)が気になり、3人の携帯電話に連絡したがつながらなかった。固定電話(自宅)に連絡したところ何回もかかって、全員無事なことを確認できたので、電話を切ってしまった。その後、津波の情報を知り、携帯電話・固定電話に連絡し続けたがつながらなかった。	死亡:妻、長女、次女、次女の息子	“地震があったときにすぐに戻つたとしても、道路が傷んでいたりで、津波が来る前に家にたどり着くことはできなかったと思います。どうしても1時間はかかってしまったと思うんですよ。だから、地震直後につながった電話で何で「逃げる」と一言、言えなかったのかなと思って、それが悔やみきれないんです。いつまでも、この悔やみは抜けないね。亡くなったみんなに本当に申し訳ないなと思って……。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
12	男性	42歳	住宅設備工事会社勤務(消防団員)	宮城県	山元町	ポンプ車で避難の呼びかけをしていたところ、地震発生から約1時間が経過して、津波が住宅街に流れ込んで来たのを目撃し、ポンプ車で避難を始めた。避難中に、友人の娘(14歳)が道沿いで立ちすくんでいるのを発見。祖父(85歳)の足腰が弱つており自力で助けることが出来なかったため避難できずいた。団員2人でポンプ車に乗せようとしたところ津波に襲われた。	死亡:友人の娘、友人の祖父	“何もできないというのが悔しいというかな……。何のために消防団員をしているのかなと、思いましたよね。”“悔しいですよ。助けたかったんですけど、あと1分30秒、1分でも30秒でも早くポンプ車で上に乗って来ていたら、二人とも助けられたかなって思うこともあります。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
13	女性	40歳	仙台空港敷地内の民間航空会社で事務職	宮城県	山元町	仕事で町の外にいた。大津波警報を知り、自宅に電話して娘(14歳)9に避難するように促した。しかし、足腰が弱い祖父(85歳)があるので、どうしようかと言っていた。近所の人に頼んで避難できないかと娘に話した。	死亡:娘、祖父	“地震が起きてすぐに揺れは、間に合ったのかなと思うんです。でも、緊急事態だったので、状況を把握してからと思ったのですが、それではやっぱり遅かったな。今にして思うと、早く帰って来ればよかったかと思つています。……私は(娘)「助けられなくてごめん」と謝りたいです。誰のせいでもない、やっぱり私たちが一番に助けに来なくてはならなかった。それを今も悔やんでいます。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
14	男性	18歳		宮城県	東松島市	母親と車で避難中、ある家の人から「早くこっちに来い」と何度も呼ばれ、その家の2階に上がった途端に津波が来た。近くに住む祖父のことが心配になっていたが、その家の外には子どもを含めた10人ほどが流れ着いているので声を上げて全員を救出した。しかし、その後、祖父は遺体で発見された。	死亡:祖父	“ちょっと矛盾があったんですけどね。今、ここにいる人たちは助けなきゃいけないんだけど、自分が本来心配しているのはおじいさんのほうで……。「助けたいね」とか「立派だね」と言われることもあるんですけど、後悔しきれないんです。”	
15	男性	78歳		宮城県	東松島市	夫婦で車で避難をしている途中、津波に襲われた。息子の嫁が遺体で発見された。	死亡:息子の嫁	“もう少し、津波を大事として考えればよかったのらうけど、あまり簡単に考えすぎた。それを一番後悔しています。昔く見ていたのかな。それが一番悔しい。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
16	女性	45歳		福島県	三春町	安定ヨウ素剤が配布されたが、3人の娘と話し合い、長女(短大生)から薬を飲みたいと言われたため服用を見送つた。		“今、思うと親として後悔しています。あのタイミングで配ってもらって、本当はあのときに飲んだらよかったんだと思つています。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
17	男性	71歳	漁師	福島県	浪江町	地震の揺れが収まった後、津波から船を守るために、脳梗塞の後遺症で身体が不自由な妻(71歳)を、息子の嫁に頼み、港に向かった。息子の嫁に「津波は来るけれども、ここまでは来ないから大丈夫だろう」と言ってしまった。	死亡:妻、息子の嫁	“(息子の)嫁さんに「大丈夫だね」と言われたときに、「うん、大丈夫だね」と言っちゃったのが、一番悔いが残っている。「津波は来るけれども、ここまでは来ないから大丈夫だろう」と言っちゃったのが今も頭から離れないのね。”	
18	男性	65歳	漁師	福島県	浪江町	長女(35歳)、次女(33歳)、母(84歳)、伯母(84歳)を先に車で避難させた。少し遅れて、夫婦で避難しようとしたところ、津波に襲われた。夫婦は消防に救助されたが、原発事故のため4人を捜しに行くことができなかった。震災発生から34日が過ぎて捜索が始まり、次女の遺体の写真を見たが「違う」と言ってしまった。1か月後、DNA鑑定の結果、その遺体が次女と判明した。	死亡:長女、次女、母、伯母	“DNAで(次女)だってわかったんだけど、写真を見てこれが娘だって確認してやれなかったのが悔しくて、今でも。”	
19	男性	68歳		福島県	相馬市	地震後、自宅の様子を見るため、自宅に帰つたところ、津波に襲われた。津波に流れられ、自宅から2キロ離れた場所まで、自宅ごと流された。背中3センチほどのガラス片が刺さっていた。	負傷:自分	“地震があって、その後津波に遭うまでに最低20分はあったはず。ですから、その間に逃げていれば、絶対なんかににはならなかった。やっぱり、津波という想定が抜けていたことが、最も悔やまれます。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
20	男性	39歳	消防士	福島県	南相馬市	震災直後から救助・救出活動に従事。しかし、翌日(12日)からは原発事故のため捜索・救助活動は中断。	死亡:地域住民	“一つでも多くの生命を助けるためには、一刻も早い救出というのが念頭にあります。それができないというのは本当にもどかし、悔しかったですね。”	
21	男性	52歳	薬剤師	福島県	双葉町	原発から約4キロ離れた病院で薬剤師として勤務中、警察官・自衛隊員が突然やってきて全員避難するように告げた。原発が爆発する恐れがあることを知らされない中、福島第一原発1号機が爆発。		“やっぱり、もっと早く情報欲が欲しかった。爆発する前に、なんだかわからないうちに言が嗚って、ものが降ってきて。あれは本当に悔しかったですね。”	1. 他人 2. 非行為 3. 上向き
22	男性	62歳		福島県	いわき市	親しい近所のおばあさんに余震が危険だから外に出るように言うて、家に戻つた。ラジオで津波が来ることを聞き、浜の様子を見に行つたところ、これまでに見たこともないほど潮が引いていたので、津波が来ると思い、高台への避難を始めた。自宅の前で、近所のおばあさんが出てきたので、おつたものの途中でずり落ちてしまった。	死亡:親しい近所のおばあさん	“俺が、「逃げてろよ」と言っていれば、おばあさんも高台に向かう段を上がっていただろうと思うんだよね。だから、それだけが今でもね、悔いが残るんだよ。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
23	男性	63歳	消防団員	福島県	いわき市	地震後、消防車で避難を呼びかけている途中で津波に襲われた。消防車が流されてしまったため、消火活動ができない。また、がれきに阻まれて駆けつけた消防車も火災現場に近づけない。さらに、大津波への警戒から、消火活動を何度も中断せざるを得なかった。	焼失:地域の住宅	“50軒近くも燃えたのに消火できなかったという、われわれ消防団員としての悔いがありますよね。”	

表2 家族を喪失した被災者（後悔に関する証言なし）

No	性別	年齢	職業	県名	市町村名	証言者の行動・結果(事実)	喪失対象	証言(下線部:反実仮想)	反実仮想
1	男性	64歳	ガソリンスタンド経営	岩手県	宮古市	地震の後、ガソリンスタンドを閉めて、自宅に戻り、孫を迎えに行った娘を、妻とともに待っていた。津波が庭に入ってきたのを見て、「妻にお前逃げる！俺はもうダメだからお前逃げる！」と言ったところ、津波に襲われて気を失った。自宅から100mほど離れた場所で身動きが取れない状態で、夜になってから救助された。	死亡:妻	“亡くなったことをいつまでも考えていられないですし、前に進んでやていくしかないと思います。”	
2	男性	42歳	会社員	岩手県	宮古市	子どもを海に近い鯉ヶ崎地区にある妻の実家に預けていた。会社で強い揺れに遭った後、すぐに妻の実家に向かい、子どもたちを車に乗せて高台にある親戚の家まで避難した。その後、田老地区(約20km離れた)の高台の親戚の実家に車で向かった。田老地区に入る手前のトンネルを抜けたところで、津波が田老地区を襲っている光景を目撃した。	死亡:両親	“もっと家族で話し合って、津波が来るときにはこうしようと決めておけば、両親は助かったかもしれません。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
3	女性	58歳		宮城県	女川町	地震の後、夫が実家(母親、姉)に向かった。一度は自宅から避難したが、1年前の地震のときも夫は実家を見てから自宅に戻ってきたので、今回もまた戻ってくると思い、また自宅に戻った。夫が戻ってくる前に、知り合いに避難するように促されて、避難した。後日、夫が実家の無事を確認した後、自宅に戻ったと聞かされた。	死亡:夫	“主人が亡くなったことがわかったときは、もう生きていたくなかったですね。主人のところにいきたい、そのときは思いました。何も考えられなくて泣きました。私のところに戻ってなければよかったの。でも、主人は生きていたときも、命は惜しくないって話していたことがありましたから、主人ならたとえ死んでなくても、他の人でも必ず助けに戻ったと思います。そういう人でした。”	1. 他人 2. 行為 3. 上向き
4	男性	37歳	養殖業	宮城県	気仙沼市	地震の後、母(61歳)とともに、次女(保育所)と長女(小学生)を迎えに行った後、自宅に戻った。父(63歳)が岸壁で船を押し出しようとしていたので、手伝いに向かった。自分が船に乗って動かそうとしたとき、スクリーンにロープを巻きこんでしまったため、あきらめて岸壁に戻った。その後、自宅に戻り、家族で高台の裏山に避難。その途中、船を沖に出そうとしている父が乗った船を目撃した。	行方不明:父	“自分が船のスクリーンにロープを巻きこんでいなければ、親父を強引に連れ戻したかもしれません。申し訳ないという気持ちがちよっと入ってしまった、親父の言うことを聞いてしまったんですね。今さら何を言っても、どうにもならないんですけどね。何で止められなかったんだって、いっしょに逃げていれば親父も船も残っていたかもしれない……。本当に、後の祭りなんですけどね。”	1. 自分 2. 非行為 3. 上向き
5	男性	50歳	漁師	福島県	浪江町	地震の後、母(75歳)、高校生の長女、長男とともに車で移動。海岸沿いの道路を走っていたと、津波に襲われる。水が引いた後、車中の母はすでに死亡。長女の姿は見つからず。車外に放り出された長男は無事。長男とともに近くの高台に避難。原発事故のため、地震の約1ヶ月後から捜索が開始され、長女が車の下から発見された。	死亡:母、長女	“あきらめたもの、あのときは、(長女)の姿は見えない、俺のおっかあは車の中で死んでたし、俺はあきらめたもの。(長女)のこと捜すべ、なんていう考えはなかった。あきらめちゃった……。”	
6	男性	42歳	漁師	福島県	浪江町	地震の後、船を沖に出そうとしていたときに津波に襲われ、船から振り落とされ流された。11日の夜、消防によって救助され、妻と子ども2人とは再開できたが、自宅にいたはずの両親の安否は不明。	行方不明:両親	“常々、避難訓練とかでも、父親は「俺は逃げない」って言っていたので、この地震でも逃げなかったのかなと思っていましたよ。肺気腫の持病があったので、少し歩くとハーパーするような状態だったので、逃げないって、父親がそう言えば、母親も逃げなかったのかなと考えていたんです。”	
7	男性	61歳		福島県	南相馬市	自宅は海岸から1km以上も離れており、鉄筋コンクリート造りのため、津波は大丈夫だろうと考えて、避難はしなかった。妻とともに津波に襲われて、腰にしがみついていた妻の手はすぐに離れてしまった。近くに浮いていた自宅の屋根の上に登り、43時間後に自衛隊の護衛艦に発見された。	行方不明:妻	“毎日写真を見て「愛しているよ、ご飯のときはいただきますよ」、と言葉をかけているんです。(妻)に生かされているんだと思ってるの、私は。”	
8	男性	68歳	農業	福島県	南相馬市	地震の後、妻は近所の人たちと集落の様子を見に出かけた。自分は庭にいたところ、走っていく車から「逃げろ」という大声を聞いた。そのときは、まだ気楽な気持ちで、少し高い畑に移動した。地震発生から約1時間後、津波が集落を飲み込み、自宅まで到達。さらに高い場所に逃げたが、津波は畑の上まで迫ってきた。	死亡:妻、集落の住民10人	“この地区は高台なので、避難という意識がなかったんです。避難なんかなくても、ここまでは来ない、と思っていたから。あんなに大きな津波が来るとは誰も思わなくて、だから飲み込まれてしまった……。”	
9	男性	62歳	農業	福島県	南相馬市	農作業中に大きな揺れを感じた。自宅に戻ったが、津波のことは気にかけていなかった。自宅には、妻、親戚、孫などが集まっていた。親戚の「来るぞ！」という大きな声で、親戚8人が2台の車に分乗して、避難所(小学校)に向かった。妻が運転する車がついてくるか気にしていたが、スピードを緩めても来ないので、車から降りたところ、すぐ後ろまで津波が迫ってきたので、すぐに車に飛び乗った。	死亡:妻、親戚2人	“かなり気の強い女房だったから、お互いに協力しながらも、ライブル意識を持って農業をやっていました。私は彼女といっしょになってよかったと思います。”	
10	男性	41歳	食堂経営	茨城県	北茨城市	海沿いの自宅兼店舗で両親とともに食堂の営業中。地震の後、外に出たり、家の中に入ったりを繰り返していた。15時過ぎくらいに「津波が来るぞ」という話を聞き、高台に避難するため、車に乗り込み、両親が出てくるのを待っていたところ、津波に襲われた。車の窓から這い出して、家まで戻ると、母親は裸足で立ち尽くし、父の遺体があった。	死亡:父		

表3 家族以外を喪失した被災者（後悔に関する証言なし）

No	性別	年齢	職業	県名	市町村名	証言者の行動・結果(事実)	喪失対象	証言(下線部:反実仮想)	反実仮想
1	男性	40歳		岩手県	釜石市	難住居地区防災センター(避難場所には指定されていないが、約1週間前に行われた避難訓練での避難先)に避難していたところ、津波に襲われた。	死亡:防災センターに避難していた60人	“ここは津波の場合の避難場所ではないことを、もっと強く周知していたら、われわれもここに逃げ込むことはなかったかもしれません。”	1. 他人 2. 非行為 3. 上向き
2	女性	26歳	市役所・職員	岩手県	陸前高田市	地震の後、市役所に隣接する市民会館の3階に避難した。すでに40~50人が避難してきていた。その後、津波に襲われた。	死亡:市民会館に避難していた数十人	“また津波が来るのがあったとしても、市民の方がみんな安心して暮らせるような町になればいいなと思っています。”	
3	男性	66歳	自治会・副会長	宮城県	気仙沼市	地震の直後、拡声器で住民に避難を呼びかけ続けた。逃げ遅れた女性の姿を見たが、助けたくても助けられなかった。	死亡:逃げ遅れた住民と……	“よにかくいち早く何があっても高いところに避難するんだという訓練さえやっておいたら、亡くなる人は出なかったんじゃないかなと……。”	1. 他人 2. 非行為 3. 上向き
4	女性	38歳	看護師	宮城県	東松島市	避難所(野蒜小学校)に息子を迎えに行き、体育館で息子に会ってから2~3分後に津波が押し寄せた。	死亡:体育館に避難していた住民	“やっぱり、「ここから安全」というのはないんだなと思いました。少しでも高い所に最初から避難していれば、犠牲はすくなくったのかなと思います。”	1. 他人 2. 非行為 3. 上向き
5	男性	79歳	老人会・会長	福島県	相馬市	老人会の打ち合わせをしている最中に地震に襲われた。津波が来ると考え、急いで自宅に戻り、妻とともに高台にある神社に向かった。その途中、近所の人たちに避難するよう大声で呼びかけ続けた。	死亡:老人会53人のうち13人	“遠慮は津波は来ない、来てても大した高さではない、という言い伝えを信じて、みんな逃げなかったからね。逃げる場所も余裕もあつたんだから、逃げてさえいれば命は助かったんです。”	1. 他人 2. 非行為 3. 上向き
6	男性	61歳	老人施設・事務長	福島県	南相馬市	事務室での作業中に大きな揺れに襲われた。庭に出て、揺れが収まるのを待つように指示をした。念のため、高齢者を、高台にある避難所に順番に避難させることにした。車で避難所に向かう途中、津波を目撃。避難所から急いで施設に引き返したが、すでに津波に襲われていた。	死亡:施設の高齢者136人のうち36人、行方不明:職員1人	“被害がこれだけ大きくなってしまったことは本当に残念です。”	
7	女性	82歳		福島県	南相馬市	地震のすぐ後、友だち2人とともに知人の車に乗り合わせて、海のすぐ脇にある約10mの高台に避難した。避難してから20分以上が経ってから津波に襲われた。がれきに挟まれたため、引き波に流されずに済んだ。いっしょに逃げてきた2人の友だちは流された。	死亡:住民の3分の1にあたる45人	“八沢小学校あたりに避難すれば、きっと大丈夫だったよ。ここにさえ来なければ。”	1. 他人 2. 非行為 3. 上向き
8	男性	65歳	農業	福島県	南相馬市	大きな津波は来ないと思い、近所のみんなと話をしていた。倒れた家具の片付けのために、家に帰ろうとしたところ、向かいの家から「津波だ一つ」という声を聞き、海を見たら津波が押し寄せてきているので、家族を先に避難させ、自宅に貴重品を取りに戻って、軽トラックで高台に向かった。渋滞に巻き込まれたものの、10mほど後ろで止まった。	死亡:近所の住民	“酒をくみ交わしたり、これからの米作りの勉強をいっしょにやっていた仲間たちですから、本当に残念。残された家族の顔を見るのもつらい。”	